苦難の多き十年

足柄上郡支部　松下　みわ（妻）
戦没者　松下　新作
戦没地　沖縄県

昭和十九年七月十日　長女が生まれました。

二歳になる長男と四人家族。無事なることを夫はとても喜んで居りました。喜びも束の間産後七日を過ぎた夜、夫は召集令状を受け取りましたが産後の浅い私を心配して茫然と立っていました。入隊の日まで三日間です。川崎の部隊でしたが毎日忙しく、残る家族を心配しながら、夫は入隊しました。面会できる日に二、三度子供を見せに行きました。

出征して四ヶ月過ぎた十一月外出休暇で帰ってきました。夫は体を休ませる事もなく、今後の家族を心配して先ず私の実家に行き、子供が小さいので一年間預かってほしいとお願いしてきたので承知してくれと言う。二年目から夫の実家で見てくれと言ってきたからそのようにしてくれと言いました。十二月に私の実家に移りました。食糧難で非農家の生活は大変です。米や主食は配給ですが遅配欠配の中、父には苦労をかけなくてはなりません。都会から買出しの人が来て、米や主食など高値になり、地元の人には売りにくいと言われて買えなくなりました。父は野山を

©2011_財団法人神奈川県遺族会

開墾して芋などを作り食の足しにしました。
春になり友人の誘いから子供を遊ばせ乍らの仕事が出来るようになりました。川原で小石と砂の分別作業です。日除けを造り遊び場を作り、同じ境遇の人の集まりで楽しくもありました。冬は寒風が強く砂ほこりで作業が出来ません。仕方なく物差しの目盛などを作る作業に子供連れで行きました。そして一年が過ぎた頃夫の実家に移りました。食料の心配は無いけれど義弟妹に気使う事は多く辛かった。土地の習慣は早起きすること、洗濯も冬は干した物が凍るほど、朝食の支度、そして山に行く事が日課でした。
子供の面倒は何時見るのと心の中で呟いた。山車を担ぎ舅の後について山頂まで登り、牛の餌の草刈りです。車に山盛り積んで十二時には家に着くようにした。昼休み過ぎて近くの畑で草取り夕食の支度片付け、洗濯物の補修、灯火管制の下です。床に入るのは十二時過ぎです。義弟妹も病気で亡くなり家の中は淋しくなりました。
昭和二十二年夫は沖縄本島にて戦死の公報が入りました。無事の帰りを待ち侘びて居りました。今後の生活を考え、涙も出ませんでした。床に入れば枕をぬらしました。田んぼや畑の仕事を片付けてから外に日雇いに行く友達も出来て楽しみもあった。春まで重労働が続きます。子供に何を買って上げようかと喜びでした。
年明けて二月頃、私は体調をくずし高熱の日が続きこの家では三日も寝ることは出来ない。実家の父に話して医師の診察を受けました。結果肋膜炎とのことでした。二年程ゆっくり休みなさいと言われました。父に頼むしかないと思い話しましたが意外にも断られました。食生活が困苦

©2011_財団法人神奈川県遺族会

の中三人を見る事は出来ない、向こうの家は保有米もあり、みかん、玉子もある、子供はそのほうが幸せだよ。おまえ一人で来ればいいと言ってくれました。考えても仕方なく一人で休ませてもらいました。其の日は帰って義母に全てを話して子供を見てもらうことになりました。六歳、四歳の子供は母親と別居になったらと心配でなりません。早く治して子供と暮らしたい思いで一杯でした。戦争を憎みました。夫を帰せと心の中で叫びました。思うままにならない日々でしたが、薬の効果もあり微熱になり始め気持ちが少し落ち着きました。

　舅の弟さんが復員され、家の事情を知って早速移って来ることになった。三人家族で合わせて七人なりました。年は同じの子供たち、仲良くできるはずもない。心配が増すばかりです。深夜五十分も歩いて様子を見に行ったことが何度もありました。連れ出すことも出来ず高まる思いを静めて早く治して子供を迎えたい。体を休めることにしました。実家の母も昭和十二年に亡くなっていますので父の手伝いも少し始めました。

　仕事をさがし、家をさがしているうちに四年が過ぎました。ある会社に勤めることになり家が見つかればと思っていましたところ、夫の友人の皆さんが材料を集めて、実家の敷地内に小さな家を造って下さり、本当に有難かった。

　早速子供との生活が始まりました。子供達も成長し、会社に勤めることになり母子三人で働く事は喜びでした。三十五年に宅地百坪を買い四十年に新築を致しました。私は六十歳で定年となり子供二人も結婚致しました。先輩の方のお骨折りで公務扶助料も受給できました。「苦あれば楽あり」と言いますが、毎日安心して暮らして居ります。

©2011_財団法人神奈川県遺族会

昨年、家族で沖縄平和の礎に参って来ました。夫の名もあり涙のひと時。
日本国や世界が平和でありますよう祈ります。

©2011_財団法人神奈川県遺族会